

阿嘉島臨海研究所の 2003年（平成15年）

保坂 三郎
財団法人熱帯海洋生態研究振興財団
理事長
岩尾 研二
阿嘉島臨海研究所

The year of 2003 at AMSL

S. Hosaka · K. Iwao

1998年の大規模な白化現象、2001年の秋から見られ始めたオニヒトデの大発生などによって、慶良間のサンゴ礁は傷め続けられている。白化現象は、その後も小規模とは言え断続的に生じているし、オニヒトデも、多くの人々の駆除活動にもかかわらず、いまだに所によっては高密度で発生している。皮肉にも、そのおかげで一般の人々のサンゴ礁への関心は、近年非常に高くなっている。

2003年、亜熱帯総合研究所は、沖縄のサンゴ礁の経済価値を試算した（亜熱帯総合研究所 2003. 沿岸域の保全と利用に関する社会科学研究：慶良間諸島におけるサンゴ礁の生態系および景観の価値評価 34pp.）。これは、「沖縄のサンゴ礁を保全するための基金があったら、いくら払いますか？」という問いかけに対する回答をサンゴ礁生態系や景観の価値と捉えたもので、慶良間諸島や恩納村を訪れた観光客と那覇市民を対象にアンケートが実施された。その結果、最も低額だった那覇市民でも世帯当たり年間6,982円支払う意志があるから、日本の全世帯がこの金額を支払うとすると総額3,266億円を超える。この金額が沖縄のサンゴ礁の生態系・景観の価値だということ。この数字は支払い意志を意味しているので、人々の関心が高まれば、それに伴って上昇する。2004年、沖縄で開催される第10回国際サンゴ礁シンポジウムは、その後押しをすることになるだろう。そのシンポジウムでは、全体セッションの一つとして「慶良間列島」が話題になることが決まっており、慶良間のサンゴ礁は、世界的にもますます注

目を集めることになる。しかし、冒頭に述べたように、この美しい豊かなサンゴ礁も年々荒廃してきている。白化現象やオニヒトデ問題についての抜本的解決方法は、なかなか見出しにくい。阿嘉島臨海研究所では、サンゴ礁の状況をモニターするとともに、荒廃への対策の一つとして、人為的なサンゴ礁修復手法の研究を行ってきた。2003年も、環境モニタリングのほか、有性生殖を利用したサンゴ礁修復技術（海中に多量に放出されるが、ほとんどは死んでしまう卵を利用して稚サンゴを作り出し、それをサンゴ礁の修復に利用しようというもの）の確立を目指して様々な研究開発に取り組んだ。また、人々のサンゴ礁への関心と理解を高めるため、サンゴ礁教室の実施や教材の充実などの啓蒙活動も行った。こうした活動を行うにあたり、本年も日本財団からの助成を受けた。誌面をかりて、同財団のご理解とご協力に感謝申し上げます。

サンゴ礁には、先述の生態系や景観など利用しにくい分野のほかに、観光資源・漁業資源などの利用しやすい分野があり、2003年の世界自然保護基金（WWF）の報告（The Economics of Worldwide Coral Reef Degradation. 22pp.）では、その価値はおおよそ2,000億円となっている。これに先の金額と合わせた5,200億円超が沖縄のサンゴ礁の価値らしい。慶良間は、その沖縄の中でも豊かなサンゴ礁域である。今後も、その保全を目指して活動を進めて行きたい。